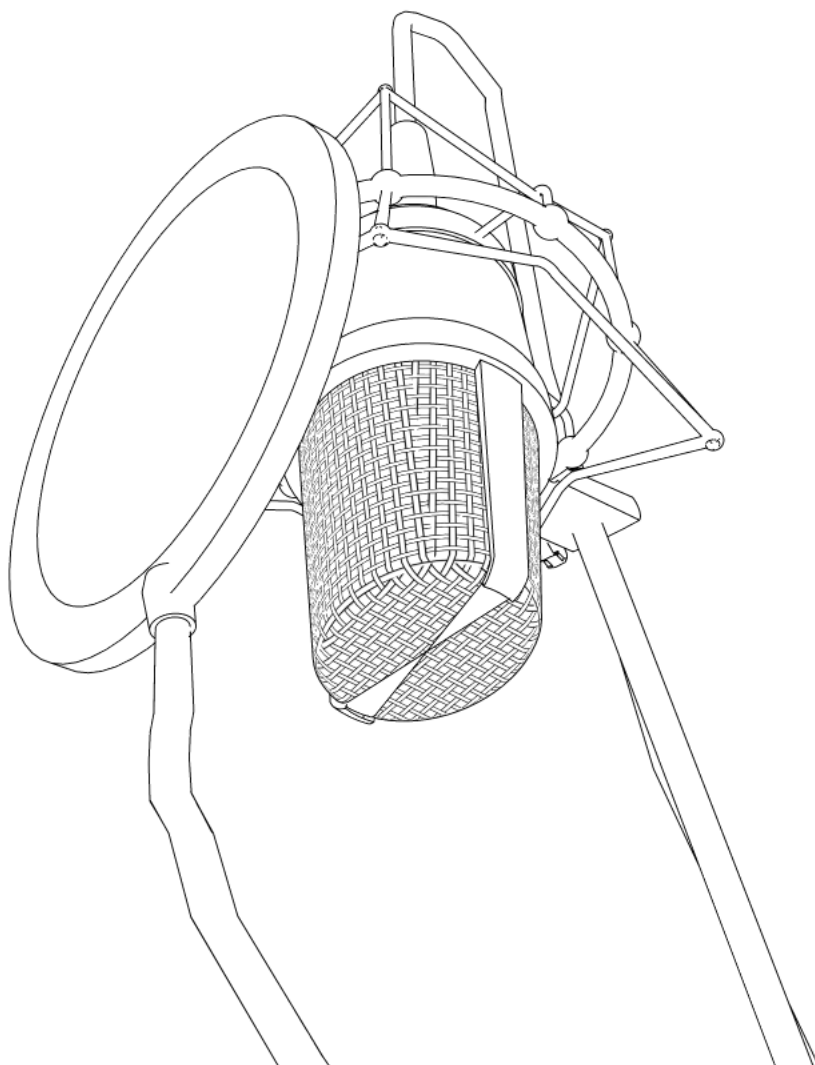


TCVV 白書

研究記事： TCVV 短観と専門雑誌における掲載率の相関

14

The TCVV Whitepaper 2011 NO. 14



声優は Visual に出るな！宣言 Ver1.11

声優は Visual に出るな会議 決議第 00000 号

声優は映画俳優・舞台俳優に比べ声だけで勝負をするという過酷な生業である。
映画・舞台俳優は身振り手振りが付加されるので視覚に訴えることが効く。
が、声優はそうは行かない。だからこそ高度な演技力が必要とされるのではないだろうか。
現在、第四次声優ブームと言われているそうだが、何か違和感を感じずにはいられない。
最近の「声優」と呼ばれる人々は Visual、その他のメディアに頼りすぎ・出過ぎではないだろうか？
今やマーケティングでメディアを十分に活用すれば、そこら辺のお姉ちゃんですら CD をあっと
いう間に売ってしまう。この状況を「沈黙のミリオンセラー」¹とは良く言ったものである。
「声優」自体が今やメディア戦略によって商品になってしまったと思う。
この戦略は聴衆を気がつかない間に購買者に変えてしまう巧みなシステムだと考える。
しかし、このシステムは本来の価値。つまり「声のプロフェッショナル」としての声優を正当に評価
していないものであると言える。

舞台俳優の中には決して Visual に耐えられる人ばかりではない。
が、そのような人が舞台に立てるのは、人を引き付ける演技力を持っているためであると考え。
一方、声優の質は低下している。これは最近のアニメーションは高度な演技力を必要としないもの
が多くなっているからといえよう。そうなれば声優の質が低下するのは至極当然のことである。²
従って、高度な演技を必要とする作品では声優の能力の限界が露呈してしまう。
例えば、劇場版新世紀エヴァンゲリオン最後の最後はアスカのほんの一言で終わる。³
しかし、この台詞は始めに用意してあったものとは違うものであったようだ。
本来は「あんたばか？」であったようだった。が、声優の力量不足のため、結局「気持ち悪い。」
へと変更を余儀なくされた。
完全に声優が役に負けてしまっていたのである。
結果、作品は中途半端に仕上がってしまい損害を被ったのは我々聴衆者である。

声優が新境地を求めるのもいい。しかし、声優も役者であるのだからまず足場を固めてから進出
するのが筋と考える。
我々は、健全な日本アニメ・マンガの質を守るため、ここに「声優は Visual に出るな！」を宣言
する。

¹ 誰もが知っている訳でもないのに 100 万枚以上売ったレコード・CD のこと。一昔前は 100 万枚といったら大部分の人がその曲を知っていた。

² 劇場版 Evangelion のパンフレット（春、夏ともに）にて清川元夢氏はプロ意識なき声優への批判とも解釈できる発言をしている。これは非常に勇気ある発言と言える。（普通はこういう事は映画のパンフでは言わないであろう。）

³ 実は Evangelion はヲタク（庵野氏）によるヲタク批判であったことはあまり報じられていない。ヲタクの皆様はそのメッセージを受け取れなかったとのこと。（レイとシンジが列車に乗っていて会話をするあのシーンが批判部分とされている）

目 次

巻頭言	5
1 第 15 回 TCVV 短期アニタレ観測調査	6
1.1 TCVV 短観概要	6
1.2 調査期間	6
1.3 集計	6
1.4 傾向分析	8
1.5 際立つ状況	8
1.6 気になる動き	9
1.7 定点観測	9
2 専門雑誌における掲載率 Vol.10	10
2.1 目的	10
2.2 解析方法	10
2.3 結果	10
2.4 データ考察	13
3 TCVV 短観と専門雑誌における掲載率の相関	14
3.1 Abstract	14
3.2 調査方法	14
3.3 調査結果	14
3.4 考察	14
3.5 TCVV 的考察	14
3.6 今後について	15
3.7 資料	15
4 『声優アワード』Watch Vol.5	16
5 声優システム論 (8)	17
6 TCVV フォーラム	21
6.1 Chairman's free talk-議長放談	21
6.2 From member's voice	22
編集後記	23

野党であるが保守本流

サブプライムローンの破綻に始まった世界的なドル売りが止まらない。一方、声優界でも声優をアイドルとして売る『ドル売り』が一向に止まる気配がない。TCVV は保守本流を自認し設立以来 14 年間、一貫して声優のドル売りの危険性を主張し反対してきた。

本年は平野綾の騒動を発端として竹達のプリクラ騒動が立て続けに発生。そして、スフィアメンバーの私生活の暴露。事が起る度に真偽の追及や糾弾が行われ声優ファンは毎日が憂鬱になっていたと思う。

そもその原因は単^{ひとえ}に声優をアイドルとして売り出す過度な『アイドル化戦略』である。各騒動はその『アイドル化戦略』の綻^{ほころ}びが露見したと言って良い。アイドル化声優は余程強固な基盤が無い限り風評によって簡単に崩れてしまう砂上の楼閣である。ひとたび脆弱性を突かれれば一気に崩壊してしまう。

上記の各騒動は昨今のアイドル化声優の脆弱性を改めて白日の元に晒した。我々はずっとこれを警告してきており、今回の騒動は成るべくしてなったと考える。だが、このような形での認識化は望んではおらず非常に残念である。

さらに先般も『男子高校生の日常』で ED を演奏するハズだったバンドのメンバーが不用意な発言を行ない物議を醸し出した。不用意だとは言えメンバーの心からの感想だろう。これもアイドル化による影響であり、声優がビジュアルに出るから要らぬ誤解やら偏見を受けるのだ。

報道の度に一喜一憂したり不毛な争いをするのはもう沢山だ。

声優のアイドル化戦略は短期的には大変上手く行く。そのことはこの十数年の間で十分に分っている。だが、それは声優自らの切り売りであり長期的な視点に立ってみると声優のアイドル化は最終的には誰も得をしない。業界的にも良くないし、声優自身も成長しない。そして、音楽など付随する派生業界的にも良くない。

声優のアイドル化はまるで一時的な快樂を得る麻薬と同じだ。一時の快樂を得るには大変強力であるが、長期的に使用するとボロボロになってしまう。『声優のアイドル化ダメ、絶対』なのだ。

我々の要求は、ただの一つ。良質なコンテンツ（作品）を求めているだ。『クソ演技に作品を潰されたくない』この一点に尽きる。

これは 14 年前からずっと変わることのない我々の基本主張である。良質なコンテンツを支えるのは良質な役者である。演技力の無い声優、ましてやアイドル声優なんて始めから求めてはいない。

ようやく、ここへ来てアイドル声優やドル売りへの取りまく状況に変化が現れはじめてきた。これが契機となって業界が我々の考えて来た方向に動けば良いと考えている。

TCVV は時代の流れとは全く逆行している万年野党であるが大声優翼賛界と化した声優界に健全な野党が必要との思いは変っていない。良質なコンテンツを支えるためにも我々、視聴者側は今後を見据えて、見た目の可愛さやアイドル活動に騙されない確かな目と耳を持つことだ。

いまこそアンチビジュアルへの回帰をしなければならない!!

The council of 'Voice actors should not appear in Visual'

1 第15回 TCVV 短期アニメレ観測調査

TCVV 情報管理部 調査課 短観担当

1.1 TCVV 短観概要

経済指標を示す「日銀短観（日本銀行短期経済観測調査）」のようにある期間に区切りアニメタレントの出演数を調査することにより現状の動向を分析する。

なお、データは「しょぼいカレンダー⁴」から TCVV の算出基準⁵により機械的に抽出したものである。

集計方法は新規出演数を 1Q 毎に集計し合算した後、4 で除することで 1Q 当たりの新規出演数の平均値を算出する。この値を「短期的な活性度（単純活性度）」と定義する。

ただし、人間は忘却をする性質があるので『単純活性度』だけでは感覚に合致しないと考える。最近の出演した方がより印象が深い。そこで人間の感覚を取り入れるため過去を割り引いて考えた『感覚活性度』も同時に算出する。

具体的な算出方法は 4Q 前は出演数に 0.25 を、同様に 3Q 前は 0.5、2Q 前は 0.75 を乗ずることで重み付けし人間の感覚により近い活性度を算出する。

活性度が 1.00 以上ということはクォータ毎に平均して新規 1 本出ていることになり、コンスタンスに新規に出ていると言える。言い換えれば『常に新しい状態』である。

順位に関しては感覚活性度を優先とし、感覚活性度が同値の場合は単純活性度で比較した。また調査結果については誌面を圧迫するため男女とも上位 20 名までの掲載とした。

(標本数 男性 59 名、女性 115 名)

1.2 調査期間

西暦 2011 年 1 月～2011 年 12 月

本調査は十分な調査をしています但内容を保証するものではありません。

1.3 集計

1.3.1 女性編

順位	氏名	2011/1Q	2011/2Q	2011/3Q	2011/4Q	単純活性度	感覚活性度
1	花澤香奈	3	7	4	4	4.50	2.81
2	沢城みゆき	4	4	5	3	4.00	2.44
3	能登麻美子	2	3	8	1	3.50	2.25
4	大原さやか	3	3	1	6	3.25	2.25

⁴<http://cal.syoboi.jp/>

⁵無料放送の TVA レギュラ出演のみで単発出演は除く

順位	氏名	2011/1Q	2011/2Q	2011/3Q	2011/4Q	単純活性度	感覚活性度
4	豊崎愛生	3	6	3	2	3.50	2.00
6	喜多村英里	4	4	2	3	3.25	1.88
5	茅野愛衣	1	2	3	4	2.50	1.88
8	伊藤かな恵	0	4	3	3	2.50	1.81
9	寿美菜子	0	2	4	3	2.25	1.75
10	井口裕香	3	1	2	4	2.50	1.69
11	阿澄佳奈	0	4	2	3	2.25	1.63
12	日笠陽子	3	3	4	1	2.75	1.56
13	戸松遥	1	5	2	2	2.50	1.56
14	伊瀬茉莉也	1	3	2	3	2.25	1.56
15	小林ゆう	1	8	1	1	2.75	1.50
16	竹達彩奈	1	1	3	3	2.00	1.50
17	斎藤千和	2	1	0	5	2.00	1.50
18	佐藤利奈	1	4	2	2	2.25	1.44
18	堀江由衣	2	2	3	2	2.25	1.44
20	井上麻里奈	4	5	0	2	2.75	1.38

1.3.2 男性編

順位	氏名	2011/1Q	2011/2Q	2011/3Q	2011/4Q	単純活性度	感覚活性度
1	岡本信彦	2	4	3	5	3.50	2.44
2	中村悠一	2	2	2	6	3.00	2.25
3	藤原啓二	2	4	3	4	3.25	2.19
4	福山潤	1	2	3	5	2.75	2.13
5	小野大輔	1	5	2	4	3.00	2.06
6	諏訪部順一	1	3	3	4	2.75	2.00
7	中田譲治	1	1	1	6	2.25	1.88
8	子安武人	1	3	2	4	2.50	1.81
9	梶裕貴	1	3	3	3	2.50	1.75
10	石田彰	1	2	2	4	2.25	1.69
11	櫻井孝宏	0	4	3	2	2.25	1.56
12	浪川大輔	2	3	0	4	2.25	1.50
13	入野自由	0	3	2	3	2.25	1.50
14	下野紘	2	4	3	1	2.00	1.50
14	杉田智和	2	5	1	2	2.50	1.44
16	神谷浩史	2	3	1	3	2.25	1.44
17	宮野真守	2	2	1	3	2.00	1.31
18	柿原徹也	1	4	1	2	2.00	1.25
19	鈴村健一	2	1	3	1	1.75	1.06
20	寺島拓篤	1	0	4	1	1.50	1.06

1.4 傾向分析

前回調査から 1 クール分しか変化が無いいためか男女とも大きな変化は少ないが細かい点について言えば、男性では下野紘が順位を 2 位から 9 位へ落とし、中村悠一が 2 位へ急浮上している。また女性に関しても上位 3 強は殆ど変化ないものの伊瀬茉莉也、茅野愛衣に急激な上昇が見られる。いずれにせよ上位に関しては今年一年間の良く聞いた声のまとめとしては違和感はないと思われる。

その他特徴的な事項としては常に 10 位前後だった堀江由衣の降下を始めてとして水樹奈々や平野綾など一般人が知ってそうな名前が軒並急落している。

1.5 際立つ状況

1.5.1 花澤香奈

前回 1 位をキープし、さらに数値が前回調査より上っており勢いに全く衰えが見られない。さらに 11 月には写真集も出した。

1.5.2 沢城みゆき

前回調査より順位を 1 つ上げて 2 位。相変わらず高位安定を保っている。

1.5.3 茅野愛衣

出演数がクール毎に右肩上りで上昇中。今年一番ブレイクしたと思われる。昨年の竹達彩奈並の勢いではあるが違いは声幅があること。長期間に亘り残るものと分析する。

1.5.4 岡本信彦

前回同様 1 位をキープしており男性声優ではトップを誇る。

1.5.5 中村悠一

今回調査で 2 位へ急浮上してきたが急激な伸びは急落の危険性も孕むので次回以の動きに注目したい。

1.6 気になる動き

1. 伊瀬茉莉也

前回までの調査では抜けていたが今回追加した。前回時点を補正した結果では 12 位。これまでの地道な活動が結実してきたと分析。大きな注目は浴びていないが声は単色ではなく複数出るのは強みかと思われる。

2. 野水伊織

角川作品への出演により辛うじて順位を保っている様子が窺える。堀江由衣はスタチャ依存性が強かったが野水はそれ以上に角川への依存性が非常に高く、そう言う意味では脆弱性が非常に大きい。

4. 水樹奈々

加重平均値の限界値である 0.625 を大きく下回っておりメディアで騒がれている割に出演数は少ない。

TCVV 短観は新規出演数を対象としており、且つ今回の調査は 2011 年年間の集計である。今年一年間は声優というより歌手としての付加価値を前面に出した活動していた傾向が強いと考えられる。

5. 中田譲二および藤原啓二

若手の中にあってベテラン 2 名が上位にランクインしている。これは女性声優に無い傾向であり男性声優特有の傾向である。

1.7 定点観測

1. 能登麻美子

安定した『ウィスパーボイス』の需要により順位は殆ど変化せず。

2. 堀江由衣

常に 10 位前後と沢城同様に高安定を誇っていたが今回調査で 19 位と大幅降下した。ここ数回は非常に安定していただけに今後の動向が気になる。

3. 田村ゆかり

ここ数回の調査では常に 20 位以降。

なかなか浮上していない。しかし、そのネームヴァリューと歌手活動から低位感を感じさせていない。

4. 平野綾

事務所変更前の余波が収束出来ていないのか、もしくは騒動で制作側が嫌気が来たのか前回よりさらに順位を落している。話題だけが先行している感がある。

5. スフィア（高垣彩陽、豊崎愛生、戸松遥、寿美菜子）

豊崎、寿は前回調査と変わらない位置を保っている。特に豊崎は高位安定である。逆に高垣、戸松は順位を落しており、特に高垣は大きく落している。ストーカブログ騒動があったので今後の活動に多少の影響が出るのが考えられるが業界全体でスフィア押しの傾向があるため直ちに影響するとは無いだろう。

6. 竹達彩奈

前回調査と殆ど変わらない位置。雑誌メディアでの露出度が非常に多いが順位が伸びていないのは、この位置が本来の実力ではないかと推察する。

2 専門雑誌における掲載率 Vol.10

TCVV 情報管理部 調査課 掲載率担当

2.1 目的

本寄稿は TCVV 宣言にある「「声優」と呼ばれる人々は VISUAL、その他のメディアに頼りすぎ・出過ぎではないだろうか？」という、TCVV 本来の目的に戻り TCVV 情報管理部調査課が独自（独断と偏見 ???）に解析した結果である。

では実際にどのくらいのメディア出現率なのだろうか？

本調査では主にメジャー声優雑誌「声優グランプリ（（株）主婦の友社発行）」を元にグラビアの面積にて評価する。

2.2 解析方法

以下の条件にてページに対するグラビア率を算出し、個人毎＆事務所毎にビジュアルに出ている率を算出している。

個人出現率：純カラーグラビアページ率のなかで、個人ごとに相当する占有率。複数人で掲載されている場合には単純に人数で除算する。

$$Cp3 = \frac{\text{個人でのグラビアページ数}}{\text{グラビアのみの総ページ数}} \times 100$$

事務所別出現率：純カラーグラビアページ率の中で、所属事務所別の占有率。複数事務所で掲載されている場合には事務所数で除算する。

$$Cpj = \text{事務所別出現率} = \frac{\text{所属事務所別グラビアのみのページ}}{\text{グラビアのみの総ページ数}} \times 100$$

2.3 結果

2011 年度年間下半期にかけての各号の上位 5 名をピックアップした表を以下に示す。

	7 月号	33.2p	8 月号	36.64p	9 月号	33.94p	10 月号	33.92p	11 月号	32.25p	12 月号	38.93p
1	今井麻美	15.06%	戸松遥	17.74%	花澤香菜	25.54%	竹達彩奈	26.52%	寿美菜子	20.93%	高垣彩陽	18.62%
2	田村ゆかり	13.05%	梶裕貴	13.65%	喜多村英梨	14.73%	立花慎之介	14.73%	悠木碧	17.05%	伊藤かな恵	11.56%
3	大亀あすか	12.05%	井上麻里奈	10.92%	寿美菜子	13.84%	寿美菜子	11.79%	下田麻美	15.5%	梶裕貴	11.56%
4	茅原実里	9.94%	水樹奈々	10.92%	田村ゆかり	9.60%	大亀あすか	10.31%	茅原実里	12.4%	羽田野渉	11.56%
5	釘宮理恵	7.03%	寿美菜子	6.82%	鈴村健一	7.99%	水樹奈々	5.89%	田村ゆかり	10.39%	水樹奈々	10.27%

表 1: 2011 年下半期個人出現率上位 5 名

		208.88p		
1	寿美菜子	9.67%	ミュージックレイン	26.68%
2	高垣彩陽	6.78%	シグマ・セブン	13.46%
3	戸松遥	6.07%	アイムエンタープライズ	11.62%
4	水樹奈々	5.98%	アーツビジョン	9.31 %
5	茅原実里	5.31%	EARY WING	6.94 %
6	田村ゆかり	5.24%	大沢事務所	5.68%
7	竹達彩奈	4.79%	APD/リンクアーツ	5.31%
8	梶裕貴	4.55%	アクセルワン	4.13%
9	今井麻美	4.55%	プロ・フィット	3.11%
10	豊崎愛生	4.16%	青二プロダクション	2.9%
11	花澤香菜	4.15%	81 プロデュース	2.31%
12	大亀あすか	3.71%	ぷろだくしょんバオバブ	1.4%
13	井上麻里奈	3.59%	劇団ひまわり	1.08%
14	悠木碧	2.93%	アクロス・エンタテイメント	0.97%
15	喜多村英梨	2.39%	B-Box	0.96%
16	立花慎之介	2.39%	俳協	0.7%
17	下田麻美	2.39%	スターダスト音楽出版	0.68%
18	羽田野渉	2.54%	BGB カンパニー	0.48%
19	伊藤かな恵	2.54%	スタイルキューブ	0.48%
20	鈴村健一	1.56%	不明	0.48%

表 2: 2011 年下半年個人及び事務所別出現率上位 20 名

	2007 年 (391.55p)	2008 年 (384.24p)	2009 年 (412.55p)	2010 年 (383.28p)	2011 年 (423.8p)
1	平野綾 9.17%	平野綾 6.32%	平野綾 7.97%	水樹奈々 8.65%	豊崎愛生 6.59%
2	水樹奈々 7.82%	茅原実里 5.72%	水樹奈々 7.27%	田村ゆかり 7.07%	寿美菜子 6.51%
3	田村ゆかり 6.84%	宮野真守 5.39%	神谷浩史 6.04%	茅原実里 5.66%	高垣彩陽 6.16%
4	福山潤 2.89%	水樹奈々 5.33%	田村ゆかり 4.46%	平野綾 5.08%	竹達彩奈 5.24%
5	新谷良子 2.56%	新谷良子 5.19%	鈴村健一 4.41%	戸松遥 4.97%	水樹奈々 5.06%
6	宮野真守 2.49%	小林ゆう 4.58%	堀江由衣 4.21%	寿美菜子 3.64%	戸松遥 4.73%
7	吉野裕行 2.45%	堀江由衣 4.15%	戸松遥 4.06%	福山潤 3.58%	茅原実里 4.62%
8	小林ゆう 2.38%	田村ゆかり 3.38%	宮野真守 3.90%	豊崎愛生 3.47%	田村ゆかり 3.59%
9	堀江由衣 2.24%	野中藍 3.14%	小野大輔 3.77%	堀江由衣 3.32%	伊藤かな恵 3.48%
10	小清水亜美 2.22%	小野大輔 3.00%	茅原実里 3.37%	悠木碧 2.64%	堀江由衣 3.46%
11	茅原実里 2.12%	吉野裕行 2.86%	福山潤 2.04%	高垣彩陽 2.18%	今井麻美 2.4%
12	野川さくら 1.89%	神谷浩史 2.66%	吉野裕行 1.82%	伊藤かな恵 2.14%	梶裕貴 2.24%
13	白石涼子 1.88%	白石涼子 2.61%	平川大輔 1.29%	竹達彩奈 2.05%	花澤香菜 2.16%
14	中原麻衣 1.79%	高橋直純 2.46%	小林ゆう 1.29%	日笠陽子 1.94%	悠木碧 1.92%
15	野中藍 1.74%	杉田智和 2.32%	寺島拓篤 1.29%	神谷浩史 1.59%	大亀あすか 1.83%
16	小野大輔 1.66%	谷山紀章 1.76%	能登麻美子 1.27%	入野自由 1.52%	井上麻里奈 1.77%
17	諏訪部順一 1.61%	鈴村健一 1.68%	岸尾だいすけ 1.26%	酒井香奈子 1.39%	下野紘 1.59%
18	森川智之 1.49%	名塚佳織 1.67%	岡本信彦 1.22%	鈴村健一 1.37%	喜多村英梨 1.43%
19	神田朱未 1.49%	平川大輔 1.63%	伊藤静 1.20%	岸尾大輔 1.31%	浪川大輔 1.42%
20	鈴村健一 1.40%	津田健次郎 1.52%	鳥海浩輔 1.24%	花澤香菜 1.31%	細谷佳止 1.34%

表 3: 2007-11 年年間個人出現率上位 20 名

	2007 年	(391.55p)	2008 年	(384.24p)
1	シグマセブン	11.46%	青ニプロダクション	9.83%
2	アイムエンタープライズ	9.65%	シグマセブン	9.65%
3	スペースクラフト・エンタテインメント	9.12%	アイムエンタープライズ	7.06%
4	アーツビジョン	8.92%	スペースクラフト・エンタテインメント	6.31%
5	青ニプロダクション	8.40%	エイベックス・プランニング&デベロップメント	5.72%
6	ぶろだくしょんバオバブ	6.53%	劇団ひまわり	5.46%
7	ラムズ	5.20%	ビーボ	5.19%
8	81 プロデュース	4.78%	ホーリーピーク	4.58%
9	俳協	4.71%	VIMS	4.15%
10	フリー	2.74%	マウスプロモーション	3.34%
11	ビーボ	2.55%	アトミックモンキー	3.11%
12	劇団ひまわり	2.48%	アーツビジョン	2.93%
13	ホーリーピーク	2.42%	俳協	2.88%
14	賢プロダクション	2.16%	フリー	2.82%
15	アトミックモンキー	1.86%	賢プロダクション	2.66%
16	マウスプロモーション	1.86%	81 プロデュース	2.47%
17	エイベックス・プランニング&デベロップメント	1.85%	ダウンゴアーティストプロダクション	2.20%
18	八重垣事務所	1.53%	ラムズ	1.98%
19	ボイス&ハート	1.34%	ぶろだくしょんバオバブ	1.82%
20	ドラマチック・デパートメント	1.33%	大沢事務所	1.80%
	2009 年	(412.55p)	2010 年	(383.28p)
1	シグマ・セブン	10.93%	ミュージックレイン	14.05%
2	アーツビジョン	10.58%	アイムエンタープライズ	12.95%
3	青ニプロダクション	9.98%	シグマ・セブン	10.29%
4	スペースクラフト・エンタテインメント	7.96%	青ニプロダクション	6.35%
5	ミュージックレイン	6.76%	アーツビジョン	6.27%
6	アイムエンタープライズ	5.69%	ぶろだくしょんバオバブ	6.03%
7	VIMS	4.79%	エイベックス・プランニング&デベロップメント	5.681%
8	マウスプロモーション	9.83%	スペースクラフト・エンタテインメント	5.105%
9	エイベックス・プランニング&デベロップメント	4.10%	VIMS	4.33%
10	劇団ひまわり	3.9%	プロ・フィット	3.50%
11	賢プロダクション	3.61%	81 プロデュース	3.35%
12	ぶろだくしょんバオバブ	2.94%	賢プロダクション	2.55%
13	俳協	2.72%	俳協	2.43%
14	大沢事務所	2.66%	大沢事務所	2.34%
15	メディアフォース	1.82%	フリー	1.66%
16	フリー	1.73%	ジャンクション	1.53%
17	カレイドスコープ	1.44%	尾木プロ	1.4%
18	不明	1.4%	アトミックモンキー	1.14%
19	プロ・フィット	1.37%	スーパーエキセントリックシアター	0.98%
20	ホーリーピーク	1.29%	不明	0.92%
	2011	(423.8p)		
1	ミュージックレイン	23.0%		
2	アイムエンタープライズ	11.07%		
3	シグマ・セブン	9.16%		
4	アーツビジョン	6.03%		
5	青ニプロダクション	5.73%		
6	81 プロデュース	4.81%		
7	VIMS	4.63%		
8	EARLY WING	3.83%		
9	大沢事務所	3.12%		
10	プロ・フィット	3.08%		
11	アクセルワン	2.98%		
12	APD/リンクアーツ	2.62%		
13	マウスプロモーション	2.36%		
14	アクロス・エンタテインメント	2.13%		
15	エイベックス・プランニング&デベロップメント	2%		
16	ぶろだくしょんバオバブ	1.9%		
17	フリー	1.65%		
18	賢プロダクション	1.25%		
19	ホーリーピーク	1.06%		
20	尾木プロ	1%		

表 4: 2007-11 年年間事務所別出現率上位 20 名

2.4 データ考察

本データも今回で丸 5 年分のデータが揃った訳であるが、5 年目にしてやっと大きな変動が現れた結果と言えるだろう。

まず、不動の地位と思われていた平野綾が今年は年頭から全くと言っていいほど見られなくなった。年間ランキングでもついに Top20 へランクインしなくなった。本人は Twitter で「誰がオワコン？」などと呟いている様だがメジャー誌に掲載されていない以上完全にトレンドが終わったと思われても致し方いないのではないだろうか。

田村ゆかり、水樹奈々の 2 人も今年はランキングを落としている。雑誌を見直してみると今年の傾向として完全にスフィアブッシュに移行した事がわかる。ほぼ毎月と言っていいほどスフィアの特集記事。そして各個人毎の特集グラビアもほぼ毎月掲載されているためである。そのスフィア。本来 4 人組ユニットであるハズのスフィアであるが、下半期、年間ランキングともに他の 3 人より少しだけ離れた位置に残りの 1 人が居るという位置付けになっている。これは本業である声優業でも見られる傾向でこれはミュージックレインの商売のやり方では無いだろうかと思ってしまう。

参考文献

(株)主婦の友社発行 月刊声優グランプリ 2007 年 1 月号～2011 年 12 月号

3 TCVV 短観と専門雑誌における掲載率の相関

TCVV 情報管理部

3.1 Abstract

TCVV 短観と声優専門雑誌におけるグラビアの掲載率との関係について直感的にはかなり乖離があると感じつつも実際、どの程度乖離しているのかこれまで分析したことはなかった。本研究では数理的な分析を行ない乖離を定量的に分析してみた。

3.2 調査方法

順位同士の相関を見るには統計学でポピュラーなスピアマン (Spearman) の順位相関係数 ρ を用いることにする。

$$\rho = 1 - \frac{6 \sum D^2}{N^3 - N}$$

D:対応する X,Y の順位差
N:値のペア数

順位相関に関してはケンドール (Kendall) の順位相関係数というのがあるがケンドールはアイテムの一致を見るため、双方のリストに同じものが出現しないければならない。ところが TCVV 短観と専門雑誌における掲載率とでは集合要素が異なるため片方のリストにアイテムが無い場合場合、ケンドールでは都合が悪い。集合要素が異なる順位でケンドールの順位相関を使用する場合については IBM Almaden 研究所の Ronald Fagin らによる研究 [1] があるが、今回は片方のリストに無いアイテムを除いてリストを補正し、スピアマンの順位相関を計算して相関を確認することにした。

3.3 調査結果

2011 年夏の調査結果を補正した別表に示す。グラビア掲載率については 37 位の沢城みゆきまでしかデータが無いので標本数は 37 個とした。これにスピアマンの順位相関を定義通りに計算すると相関係数が 0.27 となった。

3.4 考察

TCVV 的な考察は後述するとして、まずは一般的な考察をしてみたい。2011 夏において相関が 0.27 と出たが、グラビア掲載率については 37 位の沢城みゆき以下はデータが無いので実際にはずっと低いと思われる。

集合要素のアンバランスは問題であると考えている。調査方法のところでも述べたが他方のリストから要素を取り除くという手法はいささか乱暴だと考える。

実際、やってみると双方のリストにかなりの抜けがあった。従って今回の方法ではあくまでも目安にしかならないと考える。今回はスピアマンの順位相関を用いたが集合要素が異なる順位について、より厳密に順位相関を評価する場合はやはり Ronald Fagin らによる研究を用いる必要があるかと考える。

また、純粋数理的な問題点の他にも評価時期が若干異なる点や雑誌には男性と女性が混っている点、さらには雑誌媒体が一誌のみの統計調査であるということもある。

3.5 TCVV 的考察

一般的に『+0.2 ~ +0.4 はやや弱い相関』である。今回の分析結果は、あくまでも目安に過ぎないが相関はかなり低くそうなことは確認された。

TCVV 短観からグラビアの掲載率を見ると乱暴な言い方が声優雑誌は話半分程度ということになる。つまり、グラビアに掲載が多くて

も出演数が多いとは言えない。寧ろ関係無いと見た方が良い位である。

声優専門誌は『今スグ売りたい人』が載っているのに対してTCVV 短観は現状出演数が多い人が上位に来る。声優雑誌は旬な声優の情報を提供というより特定の人間をクローズアップする記事を掲載することで様々な声優グッズ (CD、写真集、etc...) を売るための広告媒体に過ぎないと考えている。今回の調査で数値的にもそれが裏付けられたと思う。

3.7 資料

氏名	TCVV 短観順位	掲載率順位
花澤香菜	1	36
能登麻美子	2	30
沢城みゆき	3	37
豊崎愛生	4	1
小林ゆう	5	15
喜多村英里	6	28
伊藤かな恵	7	5
戸松遥	8	9
寿美奈子	9	8
堀江由衣	10	2
高垣彩陽	11	4
伊瀬茉莉也	12	25
阿澄佳奈	13	14
竹達彩奈	14	3
茅野愛衣	15	19
悠木碧	16	21
平野綾	17	27
水樹奈々	18	6
田村ゆかり	19	16
金元寿子	20	10
茅原実里	21	7
浅野真澄	22	23
たかはし智秋	23	26
片岡あづさ	24	12
名塚佳織	25	11
中島愛	26	20
今井麻美	27	35
原紗友里	28	13
中原麻衣	29	29
遠藤綾	30	33
佐藤聡美	31	18
酒井香奈子	32	17
神田朱未	33	24
木村まどか	34	22
皆川純子	35	31
永井幸子	36	32
May'n	37	34

表 5: 補正済 2011 年夏順位

3.6 今後について

相関については今後発行する TCVV 白書に毎回、指数の一つとして掲載したいと考える。

最近雑誌も出演に比例してきている感じがある。過去からの変化を追うことで、そのことが判明するのではないかと考える。

また、より精度の高い相関を評価するため IBM Almaden 研究所の研究結果を用いて高精度な相関を計算する研究を行う予定である。

参考文献

- [1] R. Fagin, R. Kumar, and D. Sivakumar, Comparing top k lists, SIAM J. Discrete Math., 17(2003), pp. 134.160.

4 『声優アワード』 Watch Vol.5

-2つの改革で改善されるのか？-

TCVV 情報管理部 調査課 声優アワード担当

最早、殆ど注目されなくなった声優アワード。ネット界限ではその内容の酷さから見限られている向きがある。それくらい信用が失墜していると言って良い。特に今年の第5回の酷さは目に余るものがあった。辞退者が続出したらしく主催者側より『調整に苦労した』というトンデモコメントが出たくらいだ。

例年であれば次回開催案内の告知は9月末にはあるのだが今年は10月になっても告知が無く、第6回は中止だと考えていた。このコラムも今回が最終回と思い文章を書いていたくらいだ。

それが10月18日になって第6回も開催する案内告知が出た。

今年以上の辞退者が出れば今度こそ壊滅的になってしまう。主催者側の気持ちを察すればそれだけは何としても避けたいだろう。その一心からか解決策として第6回はこれまでのアワードの改善を狙って2点が変更された。

一つは投票結果を100%反映させる、最多得票賞の新設。もう一つは中央選考委員会の設置である。

最多得票賞の新設については形骸化している一般投票を改善する目的だろうと推察する。

これまでもエントリーは一般投票を経て決定して民意を反映させていた。しかし、最終選考の段階で辞退者が出た場合、せっかくの投票が無意味になってしまう。一般投票して選考結果を楽しみにしている純粋な{声優|アニメ}ファンは事務所側都合で辞退されてしまうことを知らないまま結果を待つのである。そして、全く予想だにしない結果となって現れる。このことが失望となって声優アワードへの無期待化につながっていると考えられる。

最多得票賞は捨てられた民意を100%有効活用しようと思われるが、人気投票を大規模にやっただけという印象しか無い。しかも、従来は2ヶ月あった投票期間が11月1日から同月30日と僅か1ヶ月間だけ。期間が十分とは言えない。これまでのようにエントリーを決めるための一般投票であれば、後工程である選考作業があるため理解出来るが、最多得票賞は単に集計するだけなので期間は従来通りでも良かったはずである。少くとも年内中までは行なわないと『一年間で印象的な人』という主旨に反する。また組織票対策はどう考えるのか。そして何よりこれまで辞退しまくっている事務所を引っ張り出せるのかという疑問がある。主催者側は辞退していた事務所側を引っ張り出せるという勝算があるので今回の賞を新設したと思うが、もしこれでも辞退者が出たら、今度こそ声優アワードは絶体絶命である。

2つ目の改善策としては、透明性の高い中央選考委員会の設置である。各事務所が辞退している理由は様々あると考えるが、特定の企業が密室で評価をしているという不信感から『不透明で恣意的な声優アワードなんて辞退するわ』という感じで本アワードの価値を認めていないようである。これを改善するために主催者側は透明性の高い委員会を設置したのだろう。

しかし、内容を逐次公開してくれないとガラス張りとは言えない。どこまで公表するのが論点だと考える。

第6回声優アワードは見事、我々ファンの意を汲んだ新生アワードとなるのか、はたまた相変わらずの金と時間の無駄使い茶番アワードとなるのか3月の発表を待つとしよう。

5 声優システム論（8）

声優ユニット考(1)-スフィアと LISP と-

TCVV 議長

声優システム論とは

昨今の声優（現代声優）はアニメや洋画に声を当てるだけの存在ではなく、社会や経済にも影響を与える存在になった。

その動きは古典的な声優論では説明出来無い。そこで現代声優の振舞いを複雑系として捉えることを考え、この系を『声優システム』と名付けた。⁶

本論は『声優システム』を様々な角度から考察するものである。

1. あの件について

夏コミ終了後、次回の本論は声優ユニットについて考察を書こうかと考えていた。そんな矢先、奇しくもスフィアストカブログ騒動が起った。

当初、本件は『声豚ざまぁ』という愉快犯か組織的なアイドル声優潰しかと思っていた。

しかし、発表された声明を読むと、その思想は驚くほど TCVV と酷似しており確信犯⁷のように見えた。一見すると同じ思想の様に見えたが、結局はスフィアのプロモーションの仕方に不満を感じ、自分が考える方向性と違って来たので意趣返しをしたものである。従って TCVV の思想とは全く違う。我々はあくまでも『作品指向』であり、その作品を支える声優に注目して来た。ブログ主は声優から入っており、いわば『声優指向』で一時期はアイドル化声優を堪能している。TCVV が設立当初から声優のアイドル化を否定しているのに対して、ブログ主はアイドル声優から入っているのだ。その点が我々とは大きく違い、似て非なるものと考えている。

ただ、この騒動は声優のアイドル化による脆弱性を公けに再認識させたと思う。やり方としてはテロ行為に近く到底是認出来るものではないが、その声明はメンバーに役者としての宣言を迫るものであり事務所側を牽制し一定の効果があつたと見ている。また声優ファンへも警鐘を鳴らした。

ブログ主の行動は社会通念上、決して褒められたことではない。かと言って事務所側についても問題が無いとも言えない。

そもそも過度なドル売りさえしていなかったら、この問題は発生しなかった。

アイドル化は彼氏/彼女がいない大前提である。しかし、声優と言え人間である。人間である以上、恋愛もするだろう。

無用な炎上を避けるには『普段から徹底的に黙して語らず』かフルオープンしかないと考える。

しかし、アイドル路線で売るのであれば、それは先ず不可能であろうから必然的に黙して語らずに

⁶システムたる典型的な例は声優のためにアニメが作られるようになったこと。主従で言えば、従だった声優が主になったという点から見ても『システム』要件を満たしている。

⁷自分が行うことは良心に照らし合わせて正しく、周囲（社会）こそが間違っていると信じて行った犯罪

なってしまう。(まあ、その場合にはバレた時に大炎上するが...)

非常に無理があると思う。無理に無理が重なってやがて大崩落を起さるのは自明だった。

無理があるアイドル路線は即刻やめるべきである。これで全ての問題が解決する。

2. 声優ユニットの分類

さて、本題に戻ろう。声優ユニットは主導する形態で3つに分類出来ると考える。

- 事務所主導によるユニット
- 声優主導による勝手連的創発ユニット
- 作品主導ユニット

さらに各々について活動期限で期間限定か無期限かに分類することも出来る。

各形態について簡単に説明すると、事務所主導によるユニットは文字通り事務所が主体となって結成するものである。スフィアやLISPがその例である。声優主導による勝手連的創発ユニットであるが、声優個人が事務所を横断して仲間を集めて作るユニットである。著名な例は堀江由衣がDROPS⁸に刺激されて作ったAice⁵である。作品主導ユニットは一作品について限定で結成されるユニットである。キャラソンの性格が強く、多くの場合は期間限定である。作品主導ユニットの特徴は影響範囲が極めて限定的で他に与える悪影響が比較的少ないと考えている。

3. 声優アイドルユニットは一般的なアイドルユニットが通用しない

アイドル化声優は従来のアイドル戦略を声優に持ち込んで成功させてきた。しかし、こと声優ユニットに関してはこれが通じないと考えている。

声優は何だかんだ言っても最後は声が主体である。『あのキャラの声をやっている人』という印象付け、言わば『耳が覚えている』にしないと『誰？この人』という状態になってしまう。

また、一般的なアイドルユニットは常にユニットで仕事をするが声優はユニットで仕事するのは稀である。

失敗や成果が出ない数々のユニットは、これらの点を理解していなかったからだ。

これまでのユニット戦略は概ね、売れている声優と組ませて売れない声優を売り出す、つまり『萌えない声優を萌える声優と一緒にして萌える声優にする』を主眼にしていた。が、ブルサマーマルちゃあるまいし、そんな事出来る訳がない。

そもそも、耳が慣れていないユニットで声優の仕事をさせる事自体が無理があるのだ。もし、無理矢理一緒に仕事をするとなると適正なキャスト配置ではなくゴリ押しとなってしまう結果、作品指向のファンから反感を生むことになるだろう。

声優ユニットは各個人で知名度ならぬ『知声度』を上げ、ある時期にドンとユニット発表をして売り出すことでしか成功はしないと考える。

⁸青二プロダクションの女性声優(國府田マリ子、金田朋子、神田朱未、野中藍、白石涼子)によるユニット。その後、自然消滅。

4. LISP は何故失敗したのか

何故、LISP は大きな成果も出せず約一年で解散の憂き目にあったのだろうか？

阿澄が不人気だったと言う話が出ているが、それは全く見当外れな意見だ。

前述したように従来と同じく一般アイドルと同じ手法を使ったためと考える。

同じように事務所主導のスフィアが成功した一番の大きな理由は、構成するメンバーの知名度を時間をかけてゆっくりと高めてファンに浸透させていったことだと考える。恐らくオーディションの段階からユニット結成を狙っていたと思われる。ただ結成までにゆうに2年はかけていた。奇しくも阿澄佳奈もこの時期にメジャーデビューであった。(片岡あづさに関しては既にメジャーデビューしていたが、知名度は今一つだった)そして2009年、スフィア結成。知名度が今一つだった寿美菜子も同年4月の『けいおん!』で知名度が上がったのも幸いした。

知っている人達が集ったグループということで、『誰それ?』という抵抗感が無い。逆にLISPは著名だったのは阿澄佳奈だけで残りのメンバーは『誰それ?』状態。ファンには阿澄佳奈が客寄せパンダとして映ただろう。ファンはこれが気に入らなかったようだ。個人を売り出そうとした結果がユニット化で見事に逆効果になったのだ。十分な時間がかけられていなく『ぼっと出感』が非常に強く出てしまい抵抗感の削減が十分ではなかった。

事務所主導でもない *Aice*⁵ が成功したのは堀江由衣の手腕による点もあるが最大の理由は、やはりある程度名(声)が知れた人間が参集したためであると考えている。

LISP は twitter を使ったコミュニケーションや音楽をネット配信のみで行ったりと従来の声優ユニットとの差別化を図るために奇をてらったプロモーションを行った。しかし、最初に出来た抵抗感を削ぎ落すまでには至らなかったと思う。

結果、唐突さや雑さ、無理繰り感ばかりが目立ってしまいファンを意図した方向に向けられなかったと考える。

LISP もスフィアと同じ手法、あるいは期間を限定して集中して戦力を投入出来たのなら、ある程度の成功はしたと思う。

LISP の試みは自体は大変新しかったが見通しが甘く計画性が無さすぎた。

『声優版のプルサーマル』を狙っていたとしたら声優システム的に間違っているのである。

5. 声優ユニットとその弊害

そもそも、声売れていない新人声優にとってユニットは何のためにあるのか全く分らない。声や演技を鍛えるのが優先されるべき時期にユニット結成というのは成長を阻害するものでしか無いと考える。

また、声優自身の成長を阻害すること以外に時として我々、作品指向な者にとって大きな直接的な被害を与えることがある。

前回の本論でも述べたが声優ユニットによる犠牲となる作品が何と多いことか。ホントに迷惑だと思ったのは『乙女はお姉さまに恋してる』の声優総取り替え事件。兎ろげ原作の『^{おとめ}乙女はお姉さまに恋してる』のアニメ化に際してキャストを原作から *Aice*⁵ に総取り替えしたため原作シナリオライターがブログでブチ切れた。シナリオライターは原作キャストの声でシナリオを作ったと述べており、その落胆ぶりは察して余りあるものだった。

『這いよれ! ニャル子さん』ではLISPでのタイアップを強引に進めたために原作者が溜息をつく程の出来だった。

尤もニャル子さんの場合は企画自体に問題があったと思われるので必ずしもLISPに非があった訳

ではないと思う。声優ユニットによる直接的被害は『作品の蹂躪』と言って良い。そのくらい酷い仕打ちだということだ。

作品を重視する TCVV としても原作がボロボロになるのは耐え難い。

6. 乱立する声優ユニット

昨今、乱立する声優ユニットは事務所主導や製作委員会主導で行われることが多い。だが、何でもかんでもくっつけば良いということは、これまで論じて来たことで分かると思う。しかし、最近もまた新しいユニット『StylipS』が発表になった。構成メンバーは能登有沙、小倉唯、石原夏織、松永真穂。このうち、十分な知名度（耳が覚えているのが）があるのは小倉唯ぐらい⁹で、その他は『誰それ状態』。有名どころが半分もない。これでは成功しないと考える。

知名度稼ぎのために結成されるユニットは作品指向の TCVV にとってぶっちゃけ迷惑である。まぢで個人単位でやって欲しい。

7. スフィア、その次にあるもの

スフィアは現時点では最も成功した声優ユニットだと考える。現在のアイドル声優の台風の目だと言わざるを得ない。その証拠に滅多に一致しない TCVV 短観とグラビア掲載率がスフィアだけは良く一致している。

成功の秘訣は前述したように過去における声優ユニットの失敗を反省し上手く回避してきたからだと考える。

だが、これからは違う。スーカブログ事件に代表されるよう今後は過去にどの声優ユニットも体験したことのない未知領域へ進む。

今後の声優ユニットの成否はスフィア自身が試金石となって行なわれゆくだろう。TCVV は注目を持って観察したい。

8. 今回のまとめ。

- 個人を売り出すために結成する声優ユニット（声優版プルサーマル）は必ず失敗する。
- 演技力を鍛える大切な時期にユニットを結成させるのは根本的な問題がある。
- スフィアの正念場はこれから。
- LISP は十分な準備をして格好（カッコ）を整えれば良かった。

⁹石原夏織は小倉唯とのユニット『ゆいかり』で多少は知名度があるかも

6 TCVV フォーラム

TCVV 会員や読者の声を放談という形でお届けします。

TCVV 事務局

本誌に関する御意見、御感想をお待ちしています。

info@tcvv.org もしくは公式ページの意見箱までお寄せ下さい。

6.1 Chairman's free talk-議長放談

I. 器の大きいところを見せよ。

人格ラヂオの発言に対しては声優ファンを始め多くの人々から批判が出ました。しかし、私から言わせれば声優は演技でナンボの物、『声優顔』で結構だと思います。製作側は悠然と構えて懐の深さを見せてやれば良いのです。事態の早期収束を狙った製作側の今回の対応は暗にドル売りを認め、それを助長するだけではないかと思います。

II. 茅原実里、微妙な位置。

茅原実里、微妙なバランスで成立しているのかも。水樹奈々ほど有名ではないけど歌手要員としての需要はある。棒演技と言われつつある程度の棒需要がある。これって良く考えたら凄い絶妙なバランスだと思います。

III. 堀江由衣、田村ゆかり、水樹奈々、平野綾の存在感は依然として大きい。

堀江由衣、田村ゆかり、水樹奈々、平野綾。彼女らの存在感は依然と大きいと思います。今年の新規出演数だけを見れば一番良い堀江由衣ですら 18 位。残る 3 名も数字だけ見ればかなり危うい位置です。しかし、何だかんだ言っても存在感は依然と大きいと感じます。そう言う意味ではメディア戦略の恐ろしさを再認識しました。

IV. 新人男性声優はとっても厳しい？

TCVV 短観を見ると男性は変化に乏しいことが分かります。今回調査は 1 クール分の変化しかないのも事実ですが、女性に比べたら変化は少ないと言えます。(集計期毎の順位相関を計算すれば一発で傾向が分かると思います。)

これは男性声優においては順位が確立したら暫くは変動が少ない事を示唆しているのかと思います。さらに別の見方をすれば、新人にとっては、その牙城を切り崩すのは容易ではないだろうと思います。

V. ラムズ、まちで大丈夫か？

今回の TCVV 短観でも稼ぎ頭である野川さくらが 0 となったラムズ陣営。年間のグラビア掲載率でもラムズ陣が消えて久しいです。

『デビューしなくちゃ始まらない』というフレーズがありましたが、『事務所が無くなったら元も子もない』と思います。

VI. 『角度声優』とか『安心の角度』とか。

花澤香奈を『角度声優』と呼ぶ件。これはまさに声優のビジュアル化ど真ん中な話。ホント、どうでも良い話です。

VII. It's a SONY.

ここ最近、ジェネオン、ショウゲートが全然駄目です。それに比べてアニプレックスとミュージックレインの勢いが凄いこと。井深さん、盛田さん。貴方達の作った会社は今もの凄いことになっています。

6.2 From member's voice

情報管理部調査課主任 北沢紘一

と・よ・さ・と!

10月のある休日、出かけようとしたところ愛車のエンジンが始動しない。キーを回してもセルが回らなかったのがバッテリーの突然死かと思い交換、2日程調子が良かったが再び始動なくなり緊急入院。そんな出来事があった直後、仕事中の息抜きでTwitterで呟いたところ同じ車に乗っている新潟県在住のお知り合い某R師から「旧豊郷小で並べて写真撮ろうよ」というお誘い。お互い老い先長くない御老体に乗っているのも元氣な内にといい事で退院直後の11月3日、滋賀県豊郷町まで行ってきた。

旧豊郷小学校校舎が何故聖地として崇められているの知らない人は居ないと思うが念のため。「けいおん!」というアニメはご存知だろう。その中で主人公平沢唯達が通う桜高校、その桜高校のモデルとなったのが旧豊郷小学校である。

近年、アニメの舞台というかモデルとなった場所等が聖地として崇められる現象が出てきている。そういう自分は聖地と呼ばれる場所のある市内に住んでいる。今から9年前にWowowで「おねがいティーチャー」、その続編で「おねがいツインズ」というアニメがあったのは覚えているだろうか?あの木崎湖がある街である。ちなみに主人公達が通っていた高校のモデルになった場所の川向こうの高校に通っていたので正しく彼らと同じ様な高校生活を送っていたのである。今から10数年前に... (藁)

しかし当時はあまり聖地巡礼といった類は今ほどのトレンドは無く極一部のファンが訪れるに過ぎなかったのである。

聖地巡礼という行動が爆発的になったのは「らきすた」の鷲宮神社ではないだろうか??鷲宮も近所の大学に行っていたのである意味裏庭みたいなものだけど...

今回、豊郷へ行ってみて感じたのは「いい年してアニメか」と言った様ないわゆる軽蔑感を抱くのではなく老若男女、街全体がこれを機会に街を盛り上げようとしている様子が非常に感じられた。某R師は遠く新潟市からほぼ隔週で巡礼しているのも頷ける。

それと比較すると我が街はどうだろう?ブームが多少早かったとはいえ少し乗り遅れた感もある。尤も裏庭だってオリジナル清酒の販売をしたりとアピールをしていない訳では無い。一過性のブームでなく細々と本当にその作品を好きなファンが訪れてくれるそんな場所の方が木崎湖には合っているのかもしれない。しかし街おこしという見方をすれば利用するに値する

年明け1月から脚本:黒田洋介、原案:羽音たらくの新作アニメ「あの夏で待ってる」が始まる。アニメ情報誌等のカットにはそれらしい背景の絵があるがPVの最後の長い直線だけが思い当たる場所が無い。もしこの作品の聖地がまたしても木崎湖だとしたら今度は街全体で上手く利用出来れば良いと思う。



編集後記

本誌をご高覧頂きありがとうございます。

TCVV は今から 10 年前の 2001 年冬コミ (C61) で本誌 Vol.1 を頒布しました。それから 10 年、我々は声優の栄枯盛衰を見て来ましたがサークル参加 10 周年の節目の本年は非常に大きな動きがありました。今年は東日本大震災を始めとして天災の多い年でしたが声優界にとっても激動の年であったと思います。

平野綾騒動に始まり竹達プリクラ騒動が続き、そこへスフィアストーカー騒動さらにはバオバブの御家騒動と枚挙に暇がありません。

10 年やって来てこれほどまとめるのに苦労した事はありませんでした。

この 10 年を総括するとアイドル化により『至極当然』が歪められていると感じます。声優だって人間です。恋愛だってするでしょう。通常であれば当然だと思うことが声優界では受け入れられなくなっていると思います。今回の様々な件については業界内で反省すべきだと思います。雨降って、地固まるという諺のように、これらの事が契機となって長い目で見た時、結果として良い方向に向かって行けば良いと切に思います。

声優は大きな変化をして来ましたが本誌は変わっていません。創刊号の Vol.1 から主観に頼らない客観的なデータ分析を心掛け、また分析手法に関しても毎回妥当性を検討しながら常に客観的な分析手法を検討してきました。Vol.1 では声優の声幅を測定するために一次従属や一次独立の概念を提唱したりもしました。(そのことはバックナンバーで確認して頂きたいです)

今回は TCVV 短観とグラビア掲載率の相関について発表しました。TCVV 短観と掲載率とは毎回乖離が大きいので数理的な分析をしました。非常に奥が深く課題も多いですが今後は毎回発表して乖離具合と、そこにある真相を調べてみたいと思います。そして、ゆくゆくは本誌に収録されている統計分析結果を別冊として発刊して行きたいと考えています。

一言え、TCVV 短観を見ていてちょっと気になったことがあります。

男性声優ではベテランが上位に食い込んでいるのですが女性声優ですとベテランが上位にはいません。今の作品のバランスを考えると、こうなってしまうのですが、そう遠くない将来に問題が発生する気がします。

さて、第 6 回は中止かと思われていた声優アワードですがシステムを微妙に変更して懲りずに開催されるようです。最早誰も注目していないアワードが起死回生となるのか少しだけ注目してみたいと思います。

声優システム論ではアイドル化の副産物であるユニットについて論じました。成功するものと、そうで無いものの境界線はどこにあるのか考えました。各論的な話は個々の声優サークルにて活発にありましたが総論的な話はこれまで無かったかと思います。

Vol.1 から何度も申し上げていますが我々はアイドル声優を完全に否定・拒絶している訳ではありません。声優が本来の活動から外れて変な活動することで作品を壊されたくないだけです。極論を言えば作品を守ってくれさえすれば、どんな活動をしていても良いと考えています。ただ、今現状はビジュアル化によって良くない方向に進んでいると思います。

そんな訳で我々は今後も作品が主であり役者は従であるという基本思想を崩さず今後も活動してゆく所存です。

そんなサークルの本ですが次回もよろしくお願いします。

2011 年 12 月 27 日 TCVV 議長 萱沼真一

TCVV 白書 第 14 号 通巻 17 号

発行 「声優は Visual に出るな!会議」情報管理部

組版 L^AT_EX2e (Linux)

発行日

2011 年 12 月 30 日 (初版)

連絡先

「声優は Visual に出るな!会議」

代表者 萱沼真一

URI <http://www.tcvv.org/>

E-mail info@tcvv.org

Twitter <http://twitter.com/tcvv>

Copyright (C) 2011 The council of ‘Voice actors should not appear in Visual’

本文に一切変更を加えず、この著作権表示を残す限り、この文章全体のいかなる媒体における複製および配布も許可する。